

平成 20 年度 六反田遺跡

発掘調査成果報告会

食にまつわる縄文人の工夫と祈り



発見された「食料を貯蔵した穴」

平成 21 年 (2009 年) 3 月 7 日 (土)

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

1. はじめに

財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会と滋賀県農政水産部からの依頼により県営中山間地域総合整備事業（ほ場整備事業）一鳥居本西部地区に伴う六反田（ロクタンダ）遺跡（彦根市）の発掘調査を平成19年から行っています。

今年度の調査では、縄文時代後・晚期の集落跡などを確認し、特に食生活に関わる約3000年前の食料貯蔵用の穴（15基前後）と、その頃に製作され、豊穣を祈るために用いられた可能性のある祭祀用の土偶が見つかりました。食料貯蔵用の穴は、当時の主食料である木の実を備蓄する設備であり、土偶はその穴の1つから出土しました。現代でも「食」は重要な問題ですが、自然に依存する割合が高かった縄文時代では、ときに危機的な、より切実な問題がありました。今回の出土資料は当時の食料危機に対する技術・工夫や祈りのあり方を窺う上で貴重な資料です。

なお、工事工程の関係から、発掘調査は終了しており、現地見学はできません。このことから、当発掘調査の成果につきまして、彦根市鳥居本地区公民館をお借りして、発掘調査成果報告会を開催します。調査や報告会にあたりまして、地区の皆様や関係者の方々にいろいろとご協力を賜りました。お礼申し上げます。

2. 六反田遺跡の概要

位置	六反田遺跡は、彦根市宮田町の東、佐和山町の北の、矢倉川が旧入江内湖に流入する中で形成した扇状地の扇端部に位置しています（図1）。
調査履歴	試掘調査と発掘調査を行うまで、遺跡の詳細な内容はわかつていませんでしたが、平成19年度から始まった県営中山間総合整備事業に伴う事前の調査で、広範囲にわたって縄文時代から中世の遺構・遺物の存在が明らかとなり、大規模な遺跡であることが確認されました。
昨年度の調査	昨年度の発掘調査では、(1)縄文時代後期前葉（約4000年前）の集落跡、(2)奈良時代から平安時代（8世紀後半～10世紀後半）の集落跡が検出されました（図1の①地点）。このうち、(2)では、建物10棟、柵、物流にも用いられた可能性が高い河道、荷札として使われていた木簡などが見つかり、琵琶湖を利用した物資流通網の「ターミナル」的な性格を持っていたことがわかつきました。
今年度の概要	今回の報告対象は図1の②地点です。ここでは、縄文時代後期中頃（約3500年前）～晚期前半（約2000年前）の集落跡などを確認しました（図2）。検出した遺構は、建物跡5棟以上、墓11基以上、貯蔵穴15基、出土した遺物は土器100箱前後（復元個体数約2000点以上）、石器25箱前後（同2000点以上）、土偶1点などです。

3. 報告のポイント

発見された遺構・遺物の中で、注目されるのは縄文時代（表1）の食料貯蔵穴（図3）と土偶（写真6）です。
食料貯蔵穴 縄文時代後期末（約3000年前）のものです。貯蔵穴とは、当時の主食料の1つであった木の実（カシ・トチノキ・コナラなど）を貯蔵・備

蓄するための設備です。今回は特に、当時の木の実 12,000 粒以上が腐らずに 3000 年の時を越えて残っていました。県内の縄文時代の遺跡は約 300 地点ありますが、このような良好な遺存例は稀で、県内では大津市穴太（あのう）遺跡について 2 例目になります（注 1）。

土偶（どぐう）

祭祀に用いられていた土の人形です。乳房などを表現していることから女性を象ったと思われます。頭部や両腕、右足は欠損しています。

ポイント 1

縄文時代の食料は、自然界に存在する動植物に依存していたため、その確保・維持、さらに保存は、切実な問題でありました。ことに季節の変化は、彼らの暮らしを脅かす危機的問題でした。主食の 1 つである木の実は秋から初冬に稔ります。しかし、木々は真冬から夏の終わりまで食料を生み出してくれません。真冬から夏の終わりには、彼らにとって対処を間違えると飢餓を引き起こす危険性を帯びた季節だったのです。

貯蔵穴とは、この真冬や春から夏のために、秋の恵みを保存する施設として縄文時代に工夫・開発され、発展した設備です。彼らの「食」と暮らしを支える重要な遺構です。

現代社会もこの備蓄・貯蔵の仕組みを欠くことができません。秋に収穫した穀物を貯蔵する技術を有するから、現代社会はその人口と暮らしを維持できています。貯蔵という工夫を採用しなければ、現在の社会生活はなかったことでしょう。

今回の事例は、3000 年前の備蓄・貯蔵の様子を良好に示す遺存例です。上記のような現代社会の基礎に繋がる縄文人の工夫の痕跡を、極めて良好な状態で発見できました。

なお、今回の貯蔵穴は縄文時代後期末頃のものです。この頃を境にして関西地方では、推定人口当たりの木の実の貯蔵穴数・貯蔵量が大きく増加します（図 5）が、滋賀県下ではそれを裏付ける資料が少ない状況にありました。今回の出土例は、この点を補う資料として注目されます。

土偶もまた当時の「食」の問題に関わっていた可能性が指摘できます。全国で数万点の土偶が出土していますが、そのほとんどは女性を象っています。多くの土偶は、乳房や尻を強調していることから、「生殖」や「生物の再生産」、「豊穰（ほうじょう）」にまつわる「祈り」に関連していたとも考えられています。

関西地方では、縄文時代後期に推定人口当たりの貯蔵量が増加とともに、土偶の出土数が増加する傾向にあります（図 6）。しかし、推定人口当たりの貯蔵量が最も多くなる後期後葉の最終段階の土偶はほとんど見つかっていません。今回の出土例は、この空白を補う資料として注目されます。

ポイント 2

以上のように、今回の出土資料は当時の食の問題に対する技術・工夫や祈りのあり方を窺う上で貴重な資料だと言えます。

4. 貯蔵穴について

数と大きさ

15 基前後を検出しました。大半が直径 1 ~ 2 m 前後、深さ 0.5m 前後のものです（表 2）。

代表例の詳細

遺存状態の良好な S527 は、直径 2.02m、深さ 0.54m で、埋土は 5 層

です。これらの層の観察から、縄文時代の人々の木の実の貯蔵と、何年にもわたり同じ貯蔵穴を掘り返し（掘り直し）ていた過程が読み取れます。

第1層は黒色土、第2層は褐色土で、この2つの層の間には木の葉が厚く累積していました。2層からは木板が出土しており、蓋板の可能性も考えられます。

2層下部には底面から5cm程度の厚さで、割れていない完全体の木の実が多数出土しました。これは、縄文時代の人々がこの穴に貯蔵・備蓄していた木の実です。本来は、穴一杯に木の実が貯えられていましたが、そのほとんどは食料として消費され、そのときに取りこぼされた残りが今回出土したとみられます。

3層は灰色粘質土です。2層の貯蔵よりも前の年に穴を掘り返し、その後に堆積した土と、取りこぼされた木の実が残っていました。

さらにその下層には4層（灰色粘質土）、5層（灰色砂）が見られ、これらは3層よりもさらに前の年に掘り返し、その後に堆積した土です。

出土した木の実の種類については、現在、分析中ですが、現状では図4に示した割合だったと考えられます。カシの仲間にずいぶん偏っていることが分かりつつあります。

現在の彦根市周辺では、カシの仲間もコナラの仲間も普通に観察できる樹木で、カシの仲間（照葉樹）は11～12月に結実・落果し、トチノキ・コナラの仲間（落葉樹）は、カシより早く9～10月に結実・落果します。この各樹木の結実・落果時期と出土した種類の偏りを考慮しますと、やっと訪れた恵みの秋、縄文人は秋の前半に稔ったコナラの仲間をまず消費し、その後、秋の後半に稔ったカシの仲間を貯蔵・備蓄に回したのかも知れません。

全国最古例は縄文時代草創期の鹿児島県東黒土田（ひがしくろつちだ）遺跡（およそ11,000年前）例です。東日本では、縄文時代前期・中期に発見事例数が大きく増加しますが、西日本ではその増加期は縄文時代後期頃と考えられてきました。関西地方における推定人口当たりの貯蔵穴数や貯蔵量を集計すると、後期後葉頃にピークに達します（図5）。今回の出土例はこの頃の事例に該当します。

滋賀県内の貯蔵穴検出例としては、①栗東市下鈎（しもまがり）遺跡（縄文時代前期）、②安土町竜ヶ崎（りゅうがさき）遺跡（縄文時代中期後葉）、③東近江市（旧能登川町）正楽寺（しょうらくじ）遺跡（縄文時代後期前葉）、④大津市穴太（あのう）遺跡（縄文時代後期中葉）など、8遺跡で発見されています。このうち、木の実が良好な形で遺存していたのは、昭和57年（1982年）に調査された穴太遺跡例だけでした。今回の事例はそれに次ぐ好例となります。

日本列島では、木の実などの有機質の資料は、酸化に伴って劣化・腐朽・消滅してしまいますが、遺跡の位置した地点は湧水地点に該当し、豊富な地下水が酸化を防いでくれたため、良好な状態で木の実が遺存していました。上記の穴太遺跡も地下水のあるところから発見されています。

木の実の種類

検出事例

発見の意義

- (1) 縄文時代が始まる前の数10万年間、旧石器時代の人類は遊動生活を送っていました。人々は、「食料を求めて日々移動生活をしていた。」の

です。

当時の日本にはナウマン象やオオツノジカといった大型獣が生息していました。これらの獣は群れをなして遊動します。人々はこれらの獲物を追いかけて移動生活を送っていました。従って、持ち歩ける道具や連れて歩ける子供の数も限られていたため、道具の種類や人口を増やすことには消極的でした。

ところが、地球の気候が温暖化し始めた1万数千年前頃、大型獣は姿を消します。その頃から、人類は移動生活から定住生活へと移行し、同じところで1年中暮らすことで、道具や人口を増やしていきます。

この変化は、膨大な人口に満ちた現代社会へ繋がる重要な転機ですが、自然と向き合って生活する彼らに、大きな問題を突きつけました。大型獣を追いかける生活に比べ、木の実を主食する定住生活は安全に見えますが、実は大きなリスクを背負うことも意味していたのです。

そのリスクとは、季節に伴う食料資源の量的な変化です。秋から初冬にかけて、木の実は結実・落果期を迎え、人々の「食」を大いに支えます。しかし、冬から夏の終わりまでは結実・落果しません。自然のままでは、木の実を食料にできる期間や量は限られます。木の実という植物質資源を主食とする生活は、季節や気候の変動によって利用できる資源量が左右されるというリスクを併せ持っています。

このリスクを解消するために発明されたのが貯蔵穴です。結実・落果期により多くの木の実を人工的に貯えることで、食料として収穫できる期間は延長でき、利用できる量も大幅に増加します。

そういった意味で、貯蔵穴は生活様式の大変化を支えた技術と工夫を示す重要な遺構です。今回の出土資料は、貯蔵内容物まで良好な状態で残存した好例として注目されます。

- (2) 今回の貯蔵穴が形成された縄文時代後期後葉は、貯蔵に強く依存する時代へ関西地方の縄文社会が変貌した時期ですが、滋賀県内では、この時期の貯蔵穴は確認されていませんでした。今回の出土例はこの空白を補う例になります。

5. 土偶について

数・大きさ

現在、整理作業中のため、今後新たに増加する可能性もありますが、出土点数は1点です。大きさは長さ12.0cm、幅6.8cm、厚さ2.5cmです。

出土資料の詳細

今回出土した土偶は、上述した食料貯蔵穴S527の2層から出土しました。頭部や両腕、右足は欠損していますが、これらはわざと折り取られ、ほかのところに埋められた可能性があります。

全国最古の事例は、三重県松坂市粥見井尻（かゆみいじり）遺跡の事例（縄文時代草創期約12,000～11,000年前）です。土偶の出土数は全国で何万点もありますが、そのほとんどは東日本に集中しています。西日本の出土は一部の地域（九州中部）を除いて少なく、県内ではこれまでおよそ14遺跡29点しか出土していません（表3）。

関西地方の場合、今回出土した後期後葉（宮滝式土器期）の土偶と同時期の出土例としては、和歌山県鳥居遺跡の図7-（4）が唯一とされ、それは頭部と胸部だけが遺存したものでした。今回出土の土偶は、下半

部まで分かる同時期の初めての例となります。

六反田遺跡の土偶は、貯蔵穴から出土しており、共伴する土器も明確で、埋めた時期が特定できます。また、土偶の文様も同時期の土器の文様と類似しており、利用された時期が確実視できます。

発見の意義 (1) これまで、縄文時代後期中葉と晩期中頃の土偶の出土例は、各地で確認されてきましたが、今回の出土品は、その間の空白を埋め、縄文人の祈りの系譜を探求するための事例としても貴重です。

なお、今回の資料は、その形態から見て、図7-(1)のような山形土偶(注2)の影響を受けて作られていると推察されます。腰部や裏面に当時の土器と共に通する文様をもつ点が、山形土偶の特徴といえます。類似資料には、岐阜県高山市垣内(かいとう)遺跡の図7-(2)や同県高山市(旧大野郡丹生川村)千歳寺遺跡の図7-(3)があり、岐阜県の縄文遺跡と関係する可能性が指摘できます。

(2) 世界には、女神の体をばらして埋め、そこから新たな食物を繁茂させるという神話が数多く存在しています。これは、女神の体を生物の源一種一とみなし、それを埋めることで豊穣を祈る姿を伝える神話で、日本書紀や古事記の中にも登場します(ハイヌウェレ型神話 注2)。

縄文時代の土偶の多くもまた、乳房や尻を強調していることから、「生殖」や「多産」、「生物の再生産」、「豊穣(ほうじょう)」にまつわる神の「依代(よりしろ)」とも考えられています。今回の出土土偶も明確に2つの乳房を表現し、大きく張ったお尻を持っており、豊かな稔りを祈るために使用された可能性をうかがうことができます。

関西地方では、植物質の食料(木の実)の推定人口当たりの貯蔵量が増加する頃に、土偶の出土数が増加する傾向にあり(図6)、植物質食料の貯蔵活動と土偶を用いた祭祀の関連性が想定されます。しかし、推定人口当たりの貯蔵量が最も多くなる後期後葉の最終段階の土偶はほとんど見つかっていませんでした。今回の出土土偶は、この空白を補う資料となります。

6. まとめ ——縄文時代の「食料危機」を巡る工夫と祈り——

今回の調査では、縄文時代後期中頃から晩期前半の集落から貯蔵穴と土偶が見つかりました。当時、常に存在していた食料危機に対する食料保存への工夫と、豊穣を願い、安定的な食料の確保への祈りの痕跡を読み取ることが出来ました。その内容をまとめますと以下のとおりとなります。

- ① 彦根市宮田町地先に所在する六反田遺跡で、縄文時代後期中頃から晩期前半の集落跡が発見されました。検出した遺構は、建物跡5棟以上、墓11基以上、貯蔵穴15基、出土した遺物は土器100箱前後・石器25箱前後(それぞれ2000点以上)、土偶1点などです。
- ② 特に注目されるのは縄文時代の食料貯蔵穴と土偶です。
- ③ 食料貯蔵穴とは、当時の主食料の1つであった木の実(カシ・トチノキ・コナラなど)を貯蔵・備蓄するための設備です。自然に依存する縄文時代では、真冬から夏の終わりまでは食料資源量が大きく減少する季節で、彼らの暮らしを脅かしかねない危機をはらんでいました。貯蔵穴は、真冬から夏の食料として、秋の恵みを貯め込むために、縄文時代に工夫され、発展した施設です。彼らの「食」と暮らしを支える重要な設備

でありました。今回の発見例は、縄文時代後期末（約 3000 年前）の直径 1～2 m、深さ 0.5m 前後の貯蔵穴で、15 基前後が確認されました。残存状況は極めて良好で、約 3000 年前の木の実 12,000 粒以上が腐らずに残っていました。このような良好な遺存例は県内 2 例目で、非常に稀少です。

- ④ 今回の貯蔵穴が発見された縄文時代後期後葉は、関西地方の縄文社会が貯蔵に強く依存する時代に変貌した時期ですが、滋賀県内では、この時期の貯蔵穴の例はこれまで確認されておらず、今回の出土例はこの空白を補う例となります。
- ⑤ 縄文時代の祭祀に用いられた土偶は、乳房などの表現から女性を象ったものと考えられています。今回の出土土偶は、長さ 12.0 cm、幅 6.8 cm で、頭部や両腕、右足は欠損し、食料貯蔵穴の 1 つに埋められていました。世界の神話では、女神の体をばらして埋め、そこから新たな食物を繁茂させるという物語が数多くあります。土偶の多くは、乳房や尻を強調していることから、神話の世界にあるような「生殖」や「生物の再生産」、「豊穣」にまつわる「依代」と考えられています。関西地方では、植物質食料（木の実）の貯蔵量が増加するにつれ、土偶の出土数が増加する傾向にあることから、植物質食料の貯蔵活動と土偶を用いた祭祀の関連性が想定されています。その中にあって、後期後葉の最終段階の土偶はほとんど見つかっておらず、今回の出土例は、この空白を補う資料として注目されます。

注

1. 関西地方では 14 遺跡で確認例が知られていますが、稀少な事例であることに変わりはありません。
2. 山形土偶とは、頭部がほぼ三角形の山形を呈するタイプの土偶を指す。その原型は、茨城県霞ヶ浦周辺で、縄文時代後期中葉頃に製作され始めたとされる。くびれた胴部と外へ張り出した腰、直線的に開く足などが特徴とされ、全体的に文様は少ない傾向にある。
3. ハイヌウェレ型神話。世界各地に見られる食物起源神話の型式の 1 つで、殺された神の死体から食物が生まれたとする神話である。インドネシア・セラム島のヴェマーレ族の以下の神話がその典型である。ココヤシの花から生まれたハイヌウェレという少女は様々な宝物を大便として排出できた。あるときその宝物を村人に配ったところ、気味悪がられて殺されてしまい、死体を切り刻んであちこちに埋められた。すると、彼女の死体からは様々な種類のイモが発生し、人々の主食になったという。このような神話は、東南アジア、オセアニア、南北アメリカ大陸に広く分布しており、日本神話にも同様な説話がある。

例えば古事記では、スサノオ（速須佐之男神）とオオゲツヒメ（大氣都比売神）の次のような物語が類例として知られている。オオゲツヒメは鼻や口、尻から様々な食材を取り出し、スサノオに供していた。スサノオはそれを勘違いし、食物を汚して差し出したと怒り、オオゲツヒメを殺してしまう。ヒメの死体からは様々な食物の種などが現れ、頭に蚕、目にイネ、耳にアワ、鼻にアズキ、陰部にムギ、尻に大豆が生まれ出たので、カミムスビ（神産巢日御祖命）はこれをとって五穀の種としたという。類似した神話は、日本書紀のツクヨミ（月夜見尊）とウケモチ（保食神）の話にもあり、オオゲツヒメと同様な能力を発揮したウケモチはツクヨミの怒りをかい殺され、ウケモチの死体の頭からは牛馬、額からアワ、眉から蚕、目からヒエ、腹からイネ、陰部からムギ・ダイズ・アズキが生まれたという。

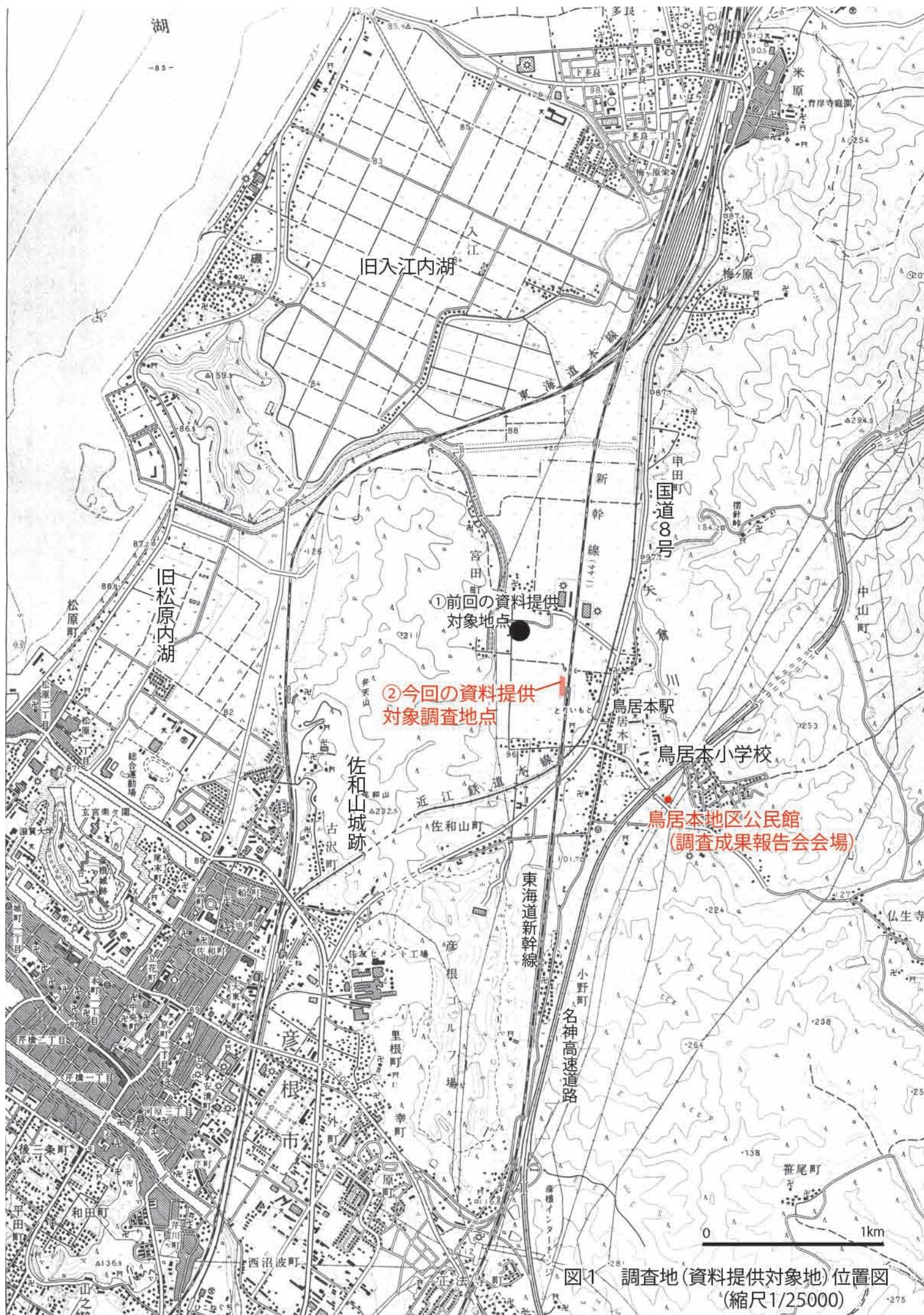


図1 調査地(資料提供対象地)位置図
(縮尺1/25000)

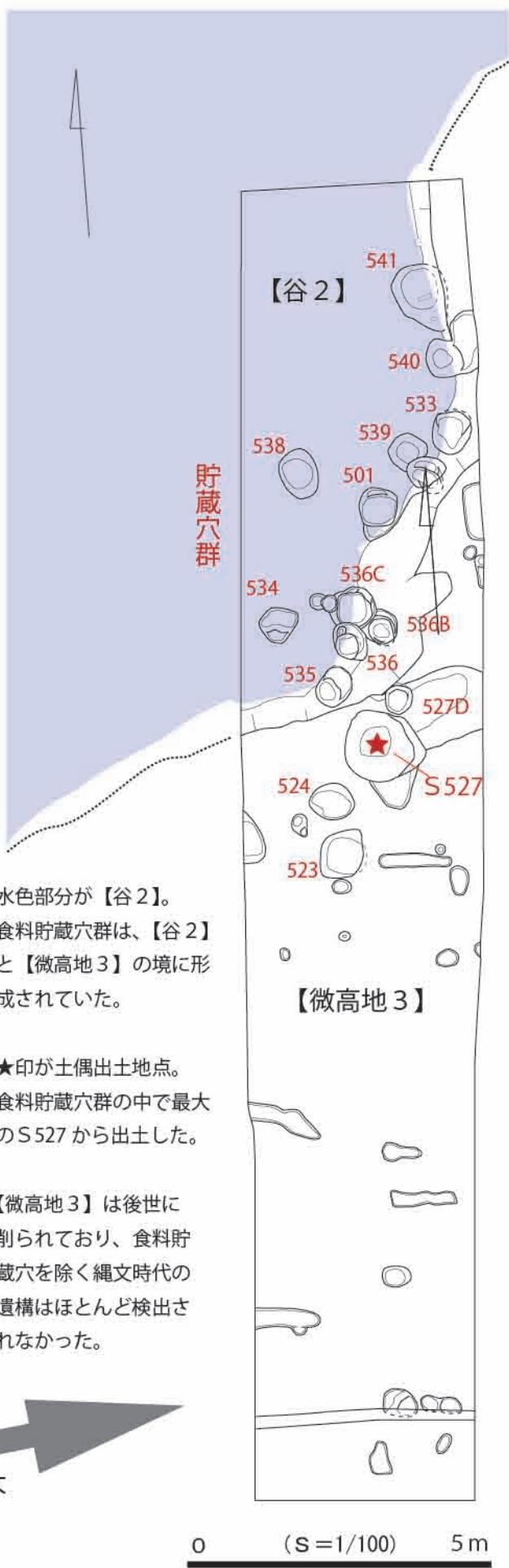
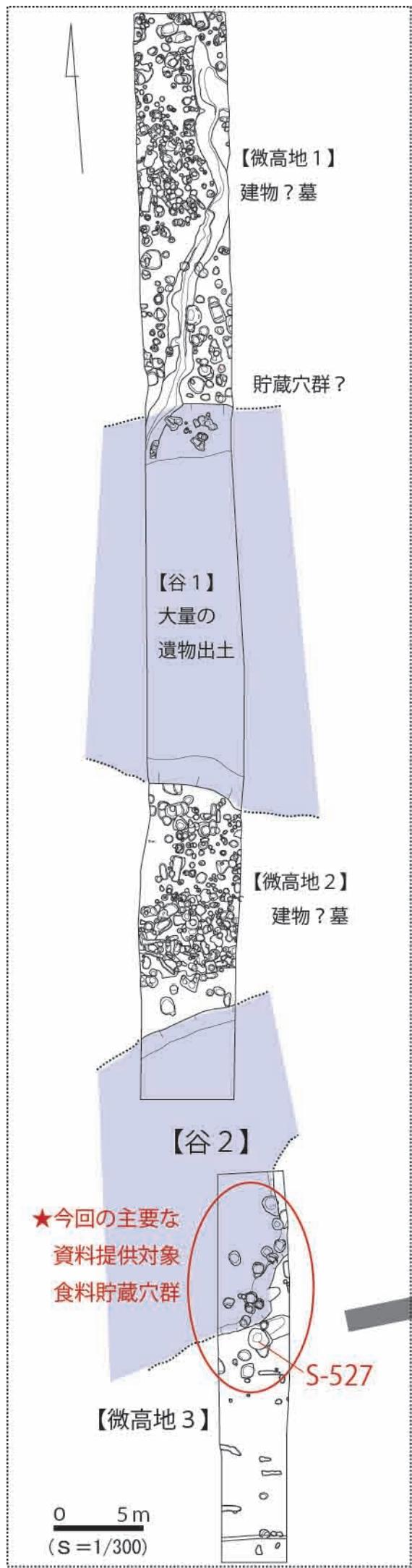


図2 遺構分布図（左：調査地点全体図
右：提供対象地拡大図）

(1)

貯蔵穴詳細図 1

S-523

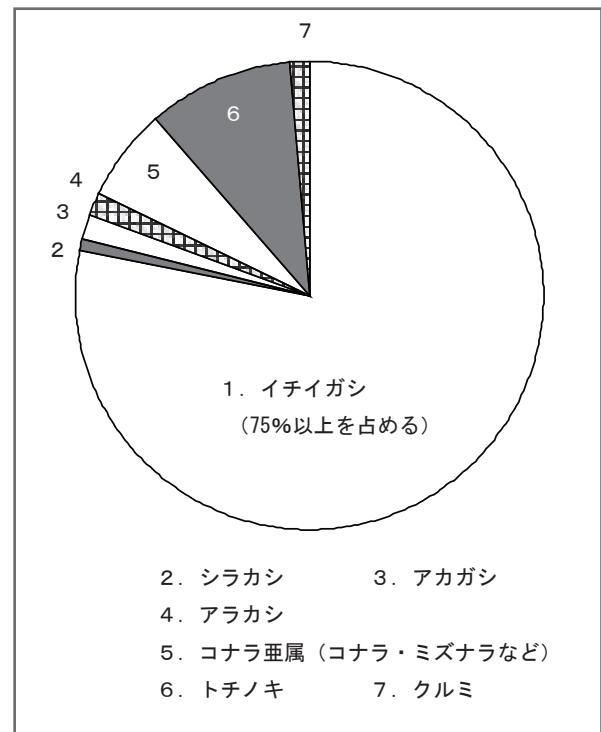
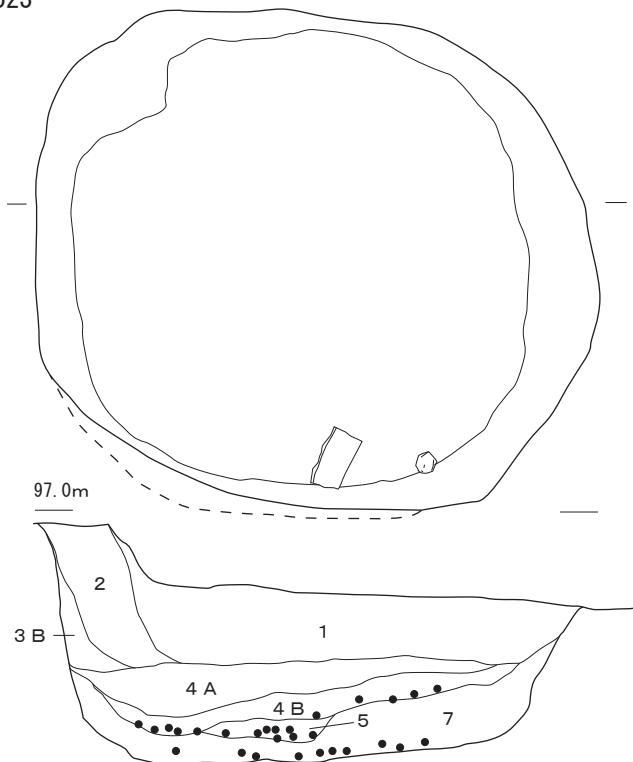


図4 食料貯蔵穴から出土した木の実の内訳
(中間集計)

(2)

貯蔵穴詳細図 2

S-527

2層から土偶が
出土した。

1. 黒色土（底面に葉が累積する。）
2. 褐色土（底面から5cmの厚さで
完形の堅果類多数出土）
3. 灰色粘質砂（完形堅果類多数出土）
4. 青灰色粗砂（堅果類なし）

96.8m

0

1 m

1層のうち、特に葉の累積が著しい範囲

図3 食料貯蔵穴詳細図

表1 繩文時代とその年代 ★印が今回の提供対象資料

時 期		およそその年代
草創期		12,000年前
早期前葉	●	9,000年前
中葉	●	米原市入江内湖遺跡の時期
後葉	●	
前期前葉	●	6,000年前
中葉	●	
後葉	●	
中期前葉	●	5,000年前
中葉	●	
後葉	●	六反田遺跡の昨年度調査地点の時期
後期前葉	●	4,000年前
中葉	●	
後葉	●	★六反田遺跡の今年度調査地点の時期
晩期前半		3,000年前
後半		

表2 六反田遺跡検出 食料貯蔵穴一覧

No.	遺構名	残存部の長さ×幅×深さ
1	S 400	1.30 × 1.14 × 0.25
2	S 501	1.15 × 1.05 × 0.53
3	S 523	1.48 × 1.3 × 0.65
4	S 526	1.50 × ? × 0.29
5	S 527	2.03 × ? × 0.55
6	S 527D	0.74 × 0.74 × 0.37
7	S 533	1.21 × 1.00 × 0.28
8	S 534	1.10 × 1.04 × 0.10
9	S 538	1.30 × 0.95 × 0.24
10	S 535	1.15 × 0.93 × 0.22
11	S 536	1.11 × 0.92 × 0.38
12	S 536B	0.85 × ? × 0.38
13	S 536C	1.30 × 1.25 × 0.40
14	S 541	1.72 × ? × 0.25
15	S 540	1.14 × 0.89 × 0.62

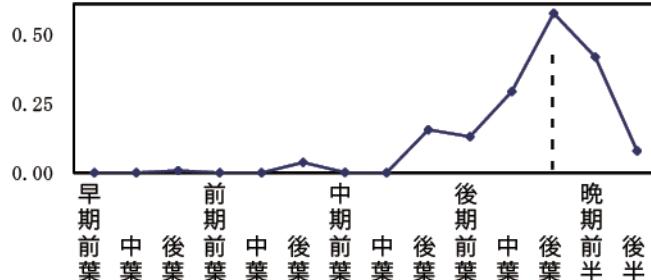


図5 1遺跡当たりの貯蔵量の推移（関西地方）

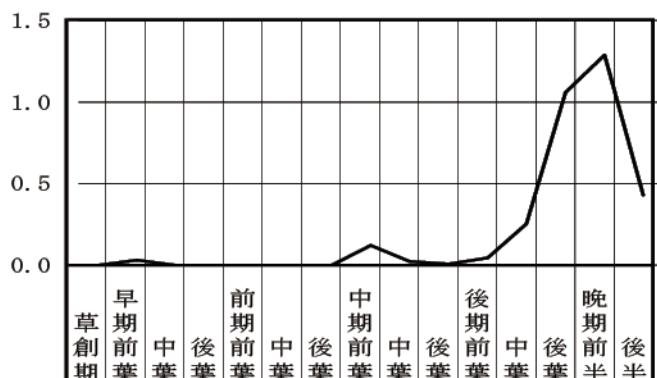


図6 1遺跡当たりの土偶出土数の推移（関西地方）

表3 滋賀県内出土縄文時代土偶一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	点数
1	粟津湖底(あわづこてい)	大津市	中期前葉	6
2	滋賀里(しがさと)	大津市	晩期中葉	4
3	穴太(あのう)	大津市	後期中葉～晩期後葉	1
4	北仰西海道(きとうげにしかいどう)	高島市	晩期	1
5	弘部野(ひろべの)	高島市	晩期	1
6	仏性寺(ぶっしょうじ)	高島市	後期前葉～中葉	1
7	筑摩佃(ちくまつくだ)	米原市	中期前葉	1
8	小川原(おがわら)	犬上郡甲良町	後期前葉～中葉	3
9	新堂(しんどう)	東近江市	晩期後葉	1
10	正樂寺(しょうらくじ)	東近江市	後期前葉(土面)	1
11	石田(いしだ)	東近江市	中期後葉	1
12	後川(うしろかわ)	近江八幡市	後期中葉	6
13	白王(しらおう)	近江八幡市	後期？	1
14	小津浜(おづはま)	守山市	晩期～弥生中期	1



(1) 山形土偶

縄文時代後期中葉に茨城県霞ヶ浦周辺で出現した土偶のタイプ。以降、関東地方を中心に製作され、分布する。

三角形（山形）の頭部を持つ。その特徴は、ハの字形に開いた腕、くびれた胴と張り出した腰である。ほかの土偶よりも乳房の表現がより写実的である傾向にある。

腰・腹部に横線・粘土紐で、ベルト状の文様を描く場合が多く、妊娠表現を強調しているとする見解もある。

（『縄文時代研究事典』東京堂出版 1994）

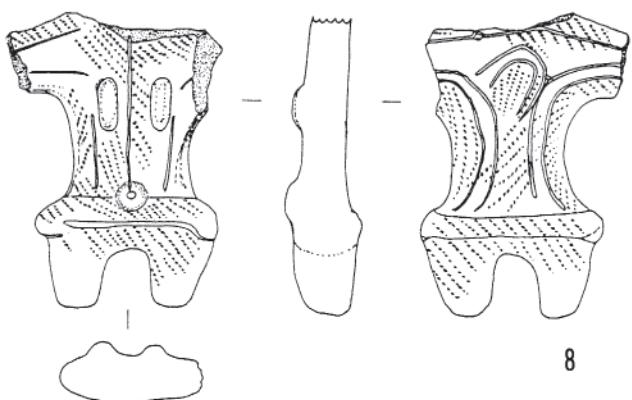
↓
関東地方から東海地方へ伝播



(2) 岐阜県垣内（かいとう）遺跡

縄文時代後期

線で文様を描いている。

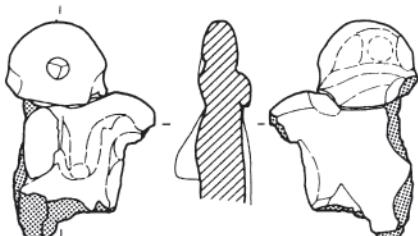


(3) 岐阜県千歳寺遺跡

縄文時代後期

線と縄目で文様を描いている。

↓
東海地方から関西地方へ伝播
(文様などがより省略された可能性がある。)



(4) 和歌山県鳥居遺跡

関西地方における縄文時代後期後葉の唯一の例だった。

頭部・胸部は残存するが、下半身の状態が不明だった。

(5) 滋賀県

六反田遺跡

縄文時代後期後葉

鳥居遺跡の例だけでは分からぬ下半身が遺存していた。



図7 出土土偶の系譜と位置付け



写真1
縄文時代の微高地1・谷1 完掘状況
(北から)



写真2
縄文時代の貯蔵穴群 完掘状況
(北から)



写真3
食料貯蔵穴 S-527
検出状況

※直径 2 m以上で、
関西地方最大級の縄文時代
の食料貯蔵施設である。



写真4
食料貯蔵穴 S-527
土層断面

※イチイガシをはじめとする
ドングリやトチノキ、クルミ
などが蓄えられていた。
日本における本格的なコメ作り
は弥生時代以降で、縄文時代は
このような堅果類が主食だった。
貯蔵穴は、秋に実ったこれら堅
果類を蓄える施設で、その内容
物が遺存していた例は極めて珍
しく県内では2例目である。



写真5
食料貯蔵穴
内容物出土状況

※およそ3300年前に落果し、採集
・貯蔵された堅果類である。
写真のとおり、発掘直後は現在生育
している堅果類と同様に鮮やかな色を
発しているが、この直後から急速に劣
化が進み、今は黒ずんでいる。

写真6 出土土偶
左下:前面 右下:背面

